





101 高田 安規子・政子
Takada Akiko・Masako

102 古橋 まどか
Furuhashi Madoka

103 佐々木 耕太
Sasaki Kota

104 長田 奈緒
Osada Nao

105 鎌田 友介
Kamata Yusuke

201 鈴木 のぞみ
Suzuki Nozomi

202 津田 道子
Tsuda Michiko

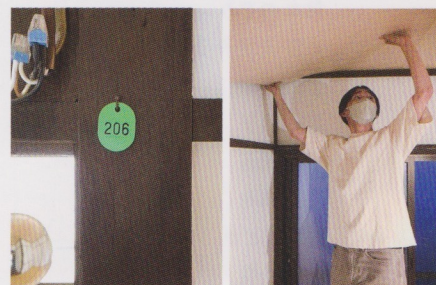
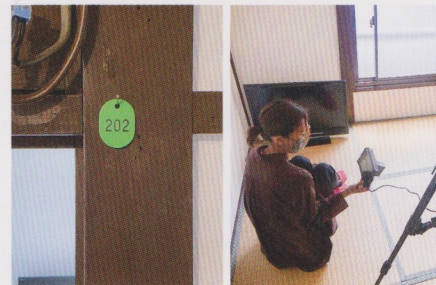
203 平田 尚也
Hirata Naoya

204 山根 一晃
Yamane Kazuaki

205 磯谷 博史
Isoya Hirofumi

206 玉山 拓郎
Tamayama Takuro

207 平川 紀道
Hirakawa Norimichi



磯谷博史

1978年生まれ。東京藝術大学建築科を卒業後、同大学大学院先端芸術表現専攻およびロンドン大学ゴールドスミスカレッジで美術を学ぶ。写真、彫刻、ドローイング、それらの相互の関わりを通して、事物への認識を再考している。主な個展に「動詞を見つける」(小海町高原美術館、長野、2022)、主なグループ展に「Constellations: Photographs in Dialogue」(サンフランシスコ近代美術館、2021)、「L'image et son double」(ポンピドゥー・センター、パリ、2021)、「六本木クロッシング2019展:つないでみる」(森美術館、東京)など。

長田奈緒

1988年生まれ。2016年東京藝術大学大学院絵画専攻修了。身近にある取るに足らないものの表面の要素を、シルクスクリーンなどの印刷により実際とは異なる素材の表面にプリントした作品を制作している。主な個展に「I see...」(NADiff Window Gallery、東京、2022)、「大したことではない(なにか)」(Maki Fine Arts、東京、2020)、主なグループ展に「Encounters in Parallel」(ANB Tokyo、2021)、「Shibuya Hikarie Contemporary Art Eye Vol.15 3人のキュレーション『美術の未来』」(渋谷ヒカリエ 8/ CUBE 1,2,3、東京、2021)など。

鎌田友介

1984年生まれ。2013年東京藝術大学大学院先端芸術表現専攻修了。歴史や社会の状況を反映し、国家の文化やアイデンティティ形成のツールともなる建築をテーマに美術と建築を横断する活動が続ける。近年は日本占領下の韓国や台湾でつくられた日本家屋や、アメリカ合衆国で焼夷弾実験における日本村の設計などの調査を通し、日本家屋が孕む多様な意味を描き出すプロジェクトを手がける。主な展覧会に「2022釜山ビエンナーレ」(釜山現代美術館)、「Spinning East Asia Series II: A Net (Dis)entangled」(CHAT/MILL6 Foundation、香港、2022)など。

佐々木耕太

1982年生まれ。2012年東京造形大学造形学部美術学科絵画専攻卒業。作品が鑑賞される場所や制作場所を、建築模型やコンピュータ上の3Dモデルを介して、絵画空間の中に入れ子状に描き込む作品を制作している。主な個展に「Cut and Paste」(LOOP HOLE、東京、2021)、「Model」(CAVE-AYUMIGALLERY、東京、2018)、主なグループ展に「佐々木耕太花木彰太『aai oua』」(See Saw gallery+hibit、愛知、2022)、「佐々木耕太+中尾拓哉『Some or Same』」(アートラボはしもと、神奈川、2019)など。

鈴木のぞみ

1983年生まれ。東京造形大学を経て、2022年東京藝術大学大学院博士後期課程修了。写真の原理を用いて事物に宿る潜像のような記憶の顕在化を試みる。主な個展に「The Rings of Saturn / Mirror with a Memory」(rin art association、

群馬、2021)、主なグループ展に「MOTサテライト2018秋 うごきだす物語」(東京都現代美術館、2018)、「無垢と経験の写真 日本の新進作家vol.14」(東京都写真美術館、2017)、「NEW VISION SAITAMA 5 迫り出す身体」(埼玉県立近代美術館、2016)など。平成30年度ポーラ美術振興財団在外研修員としてイギリスにて研修。

高田安規子・政子

1978年生まれ。2005年ロンドン大学スレード校修士課程修了。一卵性双生児でユニットとして活動。身近なものを素材に、縮尺や時間を自由に組み替え「スケール(尺度)」を主題に制作。また展示される場を読み解き、そこにあるものを活用し空間を考慮して、インスタレーションを行なう。主な展覧会に「いちばらアート×ミックス2020+」(白鳥保育所、千葉、2021)、「日常のあわい」(金沢21世紀美術館、石川、2021)、「縮小/拡大する美術 センス・オブ・スケール展」(横須賀美術館、神奈川、2019)、「装飾は流点する」(東京都庭園美術館、2017)など。

玉山拓郎

1990年生まれ。愛知県立芸術大学を経て、2015年東京藝術大学大学院絵画専攻修了。身近にあるイメージを参照し生み出された家具や日用品のようなオブジェクト、映像の色調、モノの律動、鮮やかな照明や音響を組み合わせることによって、緻密なコンポジションをもった空間を表現している。主な個展に「Anything will slip off / If cut diagonally」(ANOMALY、東京、2021)、主なグループ展に「Shibuya Hikarie Contemporary Art Eye Vol.15 3人のキュレーション『美術の未来』」(渋谷ヒカリエ 8/ CUBE 1,2,3、東京、2021)など。

津田道子

1980年生まれ。2013年東京藝術大学大学院映像研究科で博士号を取得。2021年より金沢美術工芸大学准教授。インスタレーション、映像、パフォーマンスなど多様な形態で、鑑賞者の視線と動作によって不可視の存在を示唆する作品を制作。主な個展に「Trilogue」(TARO NASU、東京、2021)、主なグループ展に「アジア・パンフィック・トリエンナーレ」(QAGOMA、ブリスベン、2021)、「インター+プレイ展 第1期」(和田市現代美術、青森、2020)、「あいちトリエンナーレ2019 情の時代」(伊藤家住宅)など。「Tokyo Contemporary Art Award 2022-2024」受賞。

平川紀道

1982年生まれ。2007年多摩美術大学大学院情報デザイン領域修了。最も原始的なテクノロジーとして計算に注目し、コンピュータ・プログラミングによる数理的処理を用い、「美」に代表される人間的な意味や価値、知覚を、人間の範疇を超えて追求している。2016年、カブリ数物連携宇宙研究機構での滞在制作で「datum」シリーズに着手。17年、チリの標高約5000mに位置するアルマ望遠鏡にて滞在制作。「六本木クロッシング2019」などで発表した最新バージョンは、シドニーのArt Gallery of NSWに収蔵された。19

年、札幌に拠点を移す。

平田尚也

1991年生まれ。2014年武蔵野美術大学造形学部彫刻学科卒業。空間、時間、物理性をテーマにネットで収集した既存の3Dモデルや画像などを素材とし、主にアッサンプラージュの手法でPCのバーチャルスペースに構築した仮想的彫刻作品を発表。仮像を用いて新たな秩序の中で存在するもう一つのリアリティを体現し、ありえるかもしれない世界の別バージョンをいくつも試すことで現実の事物間の関係性を問い直し、彫刻史の現代的な解釈を考察する。主な受賞歴に「第18回グラフィック『1_WALL展』」グランプリ、「群馬青年ビエンナーレ2019」ガトーフェスタ ハラダ賞など。

古橋まどか

1983年生まれ。英国AAスクールにて建築学を専攻の後、ロイヤルカレッジオブアートにて芸術学修士課程を修了。リサーチを基軸とし、そこから抽出した要素による空間表現を手がける。主な個展に「焚く、枯ぶ、渡る」(「DOMANI plus@愛知『まなごしのありか』」の一環として、MAT Nagoya、愛知、2022)、「Raw Material, Goods and Human Body」(iCAN、ジョグジャカルタ、2017)、「Il Quarto Stato」(クンストハレ・ブリクシア、ブレーシャ、2015)、主なグループ展に「Narratives of Exchange / Exchange of Narratives」(アルノス財団、メキシコシティ、2018)など。

山根一晃

1982年生まれ。2010年東京造形大学大学院造形専攻修了。コンセプチュアリズムの問題を引き継ぎながらも概念にとどまらず、有機的もしくは無機的な事物がさまざまな状況や領域においていかに存在しているかを軸に制作している。主な個展に「パースペクティブ/結節点/行為あるいは作用として」(CAPSULE、SUNDAY、東京、2019)、主なグループ展に「helen at the mountain」(てつおのガレージ、栃木、2018)、「ファミリー/コンセプチュアル」(Art Center Ongoing、東京、2017)、「囚われ脱獄、囚われ脱獄」(CAPSULE、東京、2016)など。

キュレーション

中尾拓哉 美術評論家/芸術学

1981年生まれ。多摩美術大学大学院博士後期課程修了。博士(芸術)。近現代芸術に関する評論を執筆。特に、マルセル・デュシャンが没頭したチェスをテーマに、生活(あるいは非芸術)と制作の結びつきについて探求している。著書に『マルセル・デュシャンとチェス』(平凡社、2017)、編著書に『スポーツ/アート』(森話社、2020)。主なキュレーションに「Shibuya Hikarie Contemporary Art Eye Vol.15 3人のキュレーション『美術の未来』」(渋谷ヒカリエ 8/ CUBE 1,2,3、東京、2021)など。

書籍設計・執筆 中尾拓哉
デザイン 松田洋和
写真撮影 赤石隆明

磯谷博史 | Isoya Hirofumi

04 《南方(13:53:57)》

2022/ペンによるウォールドローイング/サイズ可変

長田奈緒 | Osada Nao

03 《postcard(personal letter)》

2022/UVインクジェットプリント、大理石、画紙/14×9×3.8cm

04 《lenticular card on shelf》

2022/インクジェットプリント、サテン生地/36.5×51cm

05 《white plastic hangers》

2022/シルクスクリーン、木材/27.8×68.5×1.8cm

06 《map(TOURIST MAP OF JAPAN)》

2022/シルクスクリーン、木材/43.5×76×2.6cm

07 《S-shaped hook》

2022/シルクスクリーン、アクリル/18.5×5×0.5cm

鎌田友介 | Kamata Yusuke

01 《Japanese Houses》

2022/映像 12分51秒、インクジェットプリント、アクリル、木材、
1930年代に韓国・仁川に建設された日本家屋の木材/サイズ可変

佐々木耕太 | Sasaki Kota

01 《Apartment》

2022/アクリル絵具、綿布、パネル/各116.7×91cm(2枚組)

鈴木のぞみ | Suzuki Nozomi

03 《Other Days, Other Eyes:柿の木荘2階東の窓(夜)》

2022/外されていた窓、写真乳剤/各137×88×2.8cm

玉山拓郎 | Tamayama Takuro

01 《Doubled Bottle》

2021/樹脂、スプレーボトル/26×20.5×5.5cm

02 《Parallel Dishes》

2022/映像 10分

03 《M.B.》

2022/ステンレス、モーター/φ40cm、高さ可変

04 《Spinning Mop(Silver Hair)》

2022/ステンレス、ボールチェーン/170×150×4cm

津田道子 | Tsuda Michiko

02 《階段を上る》

2022/映像 2分15秒/出演:豊田ゆり佳、中尾拓哉

03 《柿の木荘202号室》

2022/映像 2分 出演:豊田ゆり佳

平川紀道 | Hirakawa Norimichi

02 《S³[hyperspherical coordinates]》

2019/コンピュータ、液晶ディスプレイ/サイズ可変

03 《S³[hopf coordinates]》

2019/コンピュータ、液晶ディスプレイ/サイズ可変

平田尚也 | Hirata Naoya

02 《Old Time Machine》

2022/デジタル銀塩プリント/42.3×34.4cm

03 《Old Time Machine 434》

2022/HDビデオ 4分34秒

山根一晃 | Yamane Kazuaki

03 《リフォーム》

2013/自転車/サイズ可変

磯谷博史 | Isoya

01 《分極》

2022/ビグマ

02 《コーナービ

2022/ビグマ

03 《補助線》

2018-2020/

163.6×106.6

長田奈緒 | Osada

01 《affixed po

2022/シルク

02 《room num

2022/シルク

佐々木耕太 | Sa

01 《Apartment

2022/アクリ

鈴木のぞみ | Su

01 《Other Day

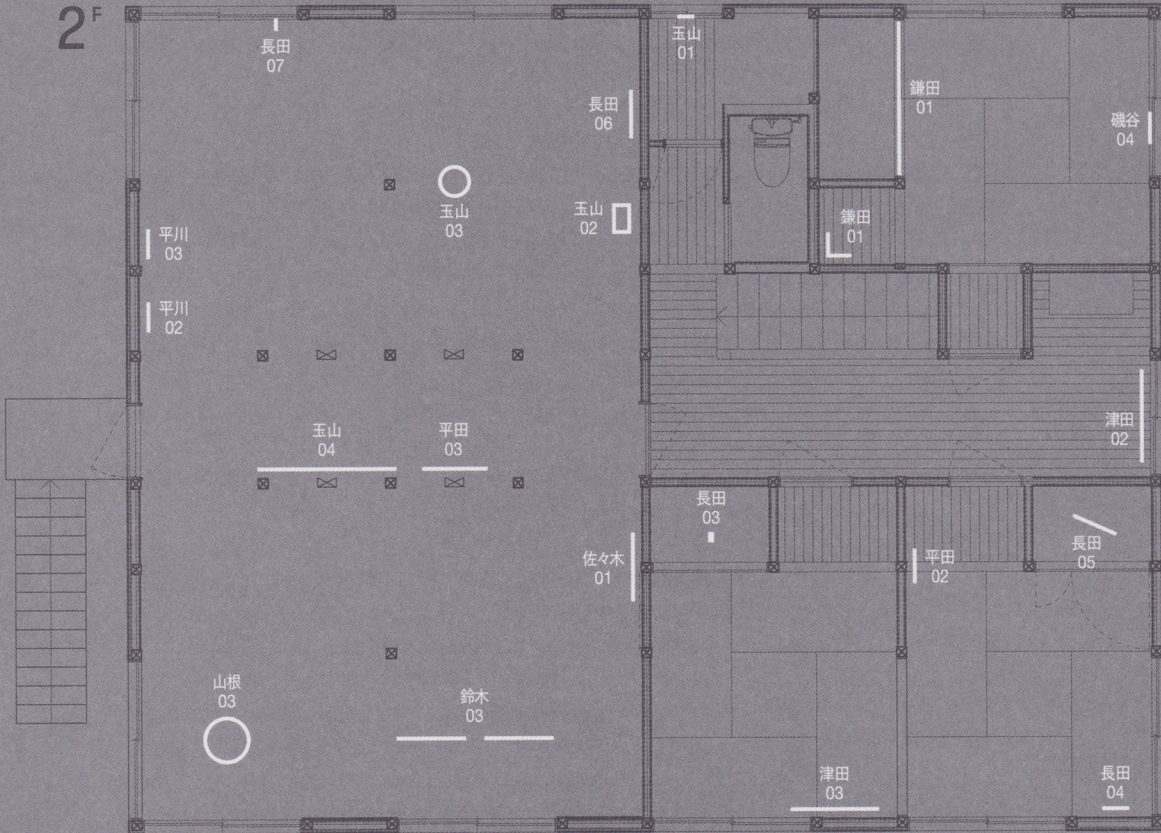
2022/外され

02 《Other Day

2022/外され

2^F

1^F



磯谷博史 | Isoya Hirofumi

- 01 《分極》
2022/ビグメントプリント、額に着色/35.3×26.3×3cm
- 02 《コーナーピース》
2022/ビグメントプリント、額に着色/35.3×26.3×3cm
- 03 《補助線》
2018-2020/ビグメントプリント、額に着色/
163.6×106.6×4.9cm

長田奈緒 | Osada Nao

- 01 《affixed postage stamp (21Kc)》
2022/シルクスクリーン、真鍮/5.6×4.6×0.2cm
- 02 《room number sign (#104 Kakinokisou, Tokyo)》
2022/シルクスクリーン、アルミニウム、釘/5×3×2.5cm

佐々木耕太 | Sasaki Kota

- 01 《Apartment》
2022/アクリル絵具、綿布、パネル/各116.7×91cm(2枚組)

鈴木のぞみ | Suzuki Nozomi

- 01 《Other Days, Other Eyes:柿の木荘101号室東の窓》
2022/外されていた窓、写真乳剤/各137×88×2.8cm
- 02 《Other Days, Other Eyes:柿の木荘102号室東の窓》
2022/外されていた窓、写真乳剤/各137×88×2.8cm

高田安規子・政子 | Takada Akiko・Masako

- 01 《The lapse of time》
2022/柿の木荘から取り出した錆の残るシンク、
さまざまな大きさのバケツ/111×82×45cm
- 02 《Inside out》
2022/柿の木荘に残されていた引き出し・
Hampton Courtのポストカード、
柿の木荘に貼られていたサインプレート、
1/12スケールのドア・窓、コニファーの植木/
各68.5×41×10cm(引き出し7点)
- 03 《簞》
2022/柿の木荘に残されていた簞、糸/
100×11.5×3cm, 23.5×4×1cm(小)
- 04 《Back and forth》
2022/柿の木荘に残されていたグラス、
さまざまな大きさのグラス/18.8×133.5×8.2cm

津田道子 | Tsuda Michiko

- 01 《外出する》
2022/映像 7分15秒/
協力:サンダー・ワッシュンク、石澤依子

平川紀道 | Hirakawa Norimichi

- 01 《habitable zone[TRAPPIST-1, no.5]》
2022/インクジェットプリント/62×62×3.6cm

平田尚也 | Hirata Naoya

- 01 《kakinoki203》
2022/VRChat world

古橋まどか | Furuhashi Madoka

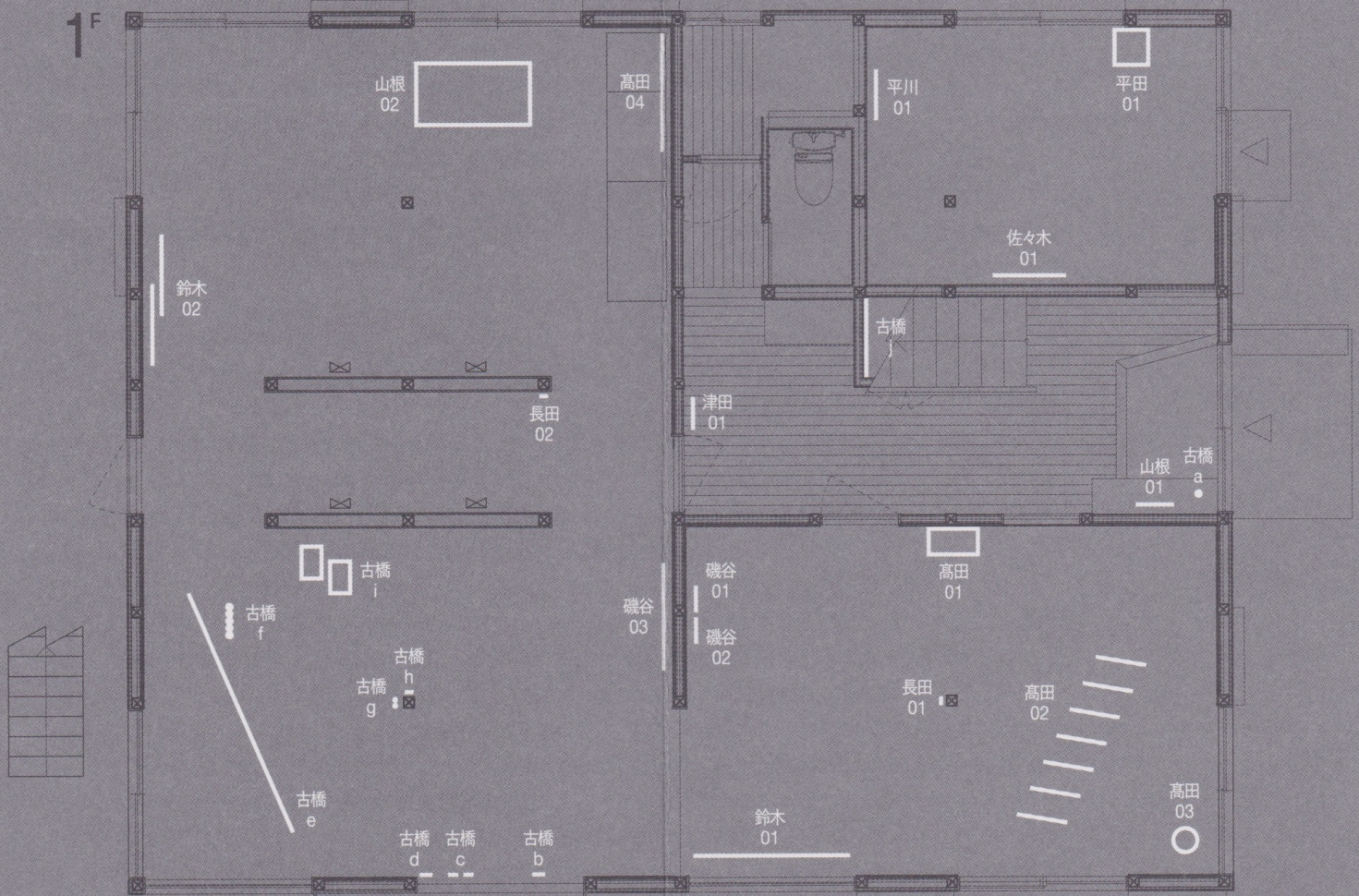
- 《辻、朽ちる、生ず》
2022
- a 枯草
- b 陶土(焼成)、枯草
- c 倒木片
- d HDビデオ、モニタ
- e 倒木
- f 水、浮草
- g インク、トレーシングペーパー
(出典:四門文化財研究室 2009
『東京都新宿区宝泉寺跡3』)
- h デジタルプリント、種子、典具帖紙
- i インク、紙、土
- j HDビデオ

山根一晃 | Yamane Kazuaki

- 01 《59日-柿の木荘-》
2022/埃/31.5×41.8×3cm
- 02 《リフォーム》
2022/石(床石)、木(床束)、
真鍮、外付けHDD、データ、布、人/
サイズ可変

メディアウムとディメンション Liminal

2022年9月3日(土)——9月27日(火) 会場:柿の木荘 〒162-0831 東京都新宿区横寺町31 <https://www.nest-a.tokyo/liminal>



玉山拓郎

玉山拓郎によるスプレーボトルは平面の鏡に向かい合うように2つが一つに融合しています。いっぽう、映像の中の2つの皿は重ならずすり抜けていきます。2つの世界が重なるのか、重ならないのか。その並行する位置関係によって、さまざまなイメージが喚起されるでしょう。

そして、平面の鏡映しの融合と分離だけではなく、鏡が球体であれば、360度の空間を同時に映し込むことも可能です。球体の鏡は、ゆっくりと回転しています。その回転は同じ場所に立つ私たちを通り抜けていくものです。くると回った鏡面仕上げのモップの先に取りつけられているボールチェーン(小さな球体の鏡)が動くとき、スプレーボトルや、皿、鏡、モップ、とどこか人間のように振る舞う私たちの身近にあるそれらは、まるで見る者と見られる者、物と人間の関係を裏返していくかのようです。

津田道子

津田道子は柿の木荘で使用されていた鏡を集めて、廊下や階段などに設置し、建物の内／外、部屋の内／外を移動する人の動きを撮影しました。

カメラのレンズを通して記録された鏡の向こうに、その映像が流されているモニタを運ぶ人が映り込みます。今、目の前にあるモニタに映るのは、鏡で裏返しとなった、かつてあった時間と空間です。モニタと同じく、鏡もまた、撮影時と同じ場所に設置されていますが、目の前にある鏡に映っている景色が、映像の中の鏡と少しだけ違うことに気づくでしょうか。改修前と改修後で、同じ場所に置かれていても、鏡の中には建物の変化が映り込んでいます。そして、鏡もカメラもその時、その場所で起こっていることを映している／映していたのです。

平川紀道

平川紀道は柿の木荘の一室から360度カメラで、約40光年先にある人類が移住できる可能性のある惑星系の中心星「TRAPPIST-1」を、撮影地点の緯度と経度、撮影時刻の方角と仰角を割り出して撮影しています。写真の中心にはTRAPPIST-1があることになりませんが、360度カメラが写した像を平面に展開すると、地球をある中心点から距離と方角を正しく記述する正距方位図法のあり方に重なり、TRAPPIST-1から見た私たちの世界、というように地図上の位置が反転します。

また、白と黒の球体が回転している2つの映像があります。この図形は四次元ユークリッド空間で回転している超球の三次元球面を別々の方法で二次元の平面に移したものです。回転は前／後、左／右、上／下という三次元方向のみならず、一つ次元が追加され、表と裏をも回転させ、その間に虚と実の空間を行き来します。

平田尚也

平田尚也はネット上に点在する既存のデータを収集し、PC内の仮想空間に構築物を立ち上げます。今回、平田は柿の木荘での収集物から、物質の情報(表面・座標)を抜き取って、データ化してコピーしました。かつての収集物は誰かの所有物であることをやめ、既成品であるさまざまな3Dデータと組み合わせられ、未知の視覚イメージへと変換されるのです。

これらの構築物は写真、映像、VRという3つの異なった空間の中で展開されます。3つの空間に複製されたとしても、同一である一つの彫刻的物体のデータは、別の媒体において、それぞれに異なった存在となっているようです。つまり、表面と座標に変換され、物理的法則から解放されたかのように振る舞いながらも、その空間に特有な情報量の制限に則って表れています。その領域ごとに平田の彫刻が「在る」と言えるのかもしれませんが。

古橋まどか

古橋まどかは柿の木荘の植生から、季節のめぐりに生命のサイクルを見出し、インスタレーションを構成しています。タイトルにある「辻」は、その十字路に立ち止まる脚を象形した文字から、「低地、台地、坂。水、陸、光、闇、その中間」へと解釈が広げられたものです。古橋はインスタレーションとは、さまざまなものが折り重なって、ある状態となっている存在しない漢字のようなものだと言います。それは概念にそって構築されたものではなく、関連するものたちが並び、意味をかたちづくる部首が集まり、ときに読み解けるものとなる可能性をもつのです。

かつて人が「朽ちた草が虫になる(腐草為蛭)」と考えていたように、土、種、草、倒れた木、そして虫、と集まってきたものたちのなかに生死のサイクルの一部を感じられるのではないのでしょうか。

山根一晃

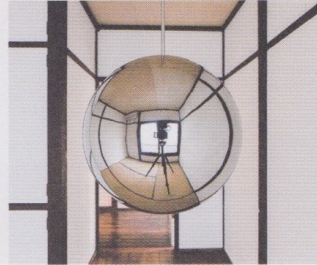
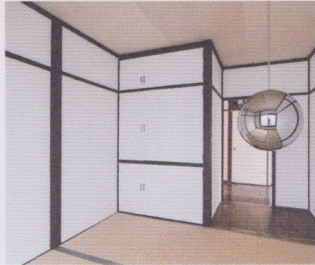
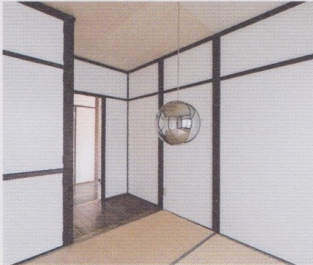
山根一晃が集めた埃は、神楽坂で活動するアーティストたちの滞在施設として使用されていた柿の木荘の1階部分からサイクロン式掃除機で収集されたものです。アーティストの生活や行為がさまざまなかたちで作品化されるいっぽうで、埃には行為を分別できない痕跡が蓄積しています。

山根は事物が他との相互関係のなかで決定されていく場について思考してきました。床に敷かれている青い布は、映像から特定の色の成分を抜き取り、別の映像を合成するクロマキーに使用されるものです。布の大きさは改修前の柿の木荘の1室の面積で、それが複数回折りたたまれています。改修前に床下に隠されていた支柱や礎が見えるように置かれ、日時計の投影棒「グノモン(ギリシャ語で「指示する者」の意)」が吊るされているほか、外付けHDDには柿の木荘の滞在者の記録が目に見えないかたちで収められています。



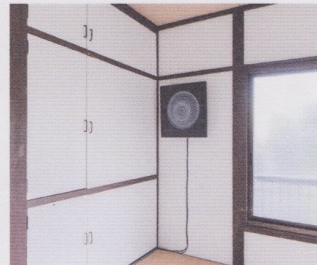
206

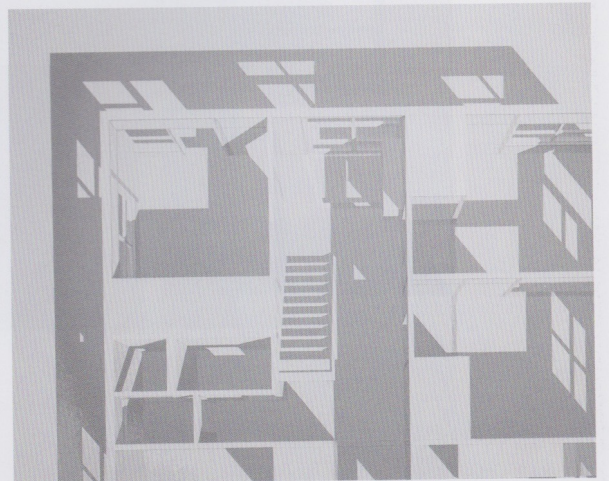
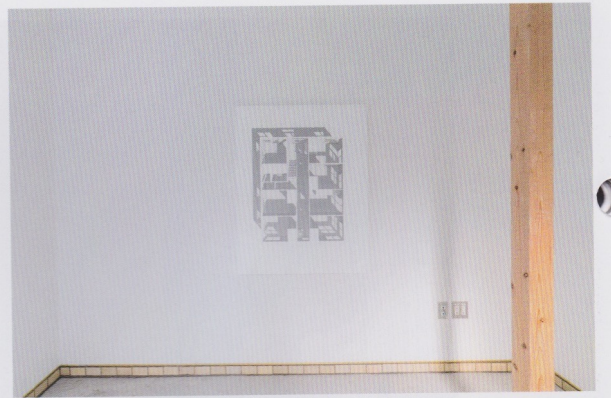
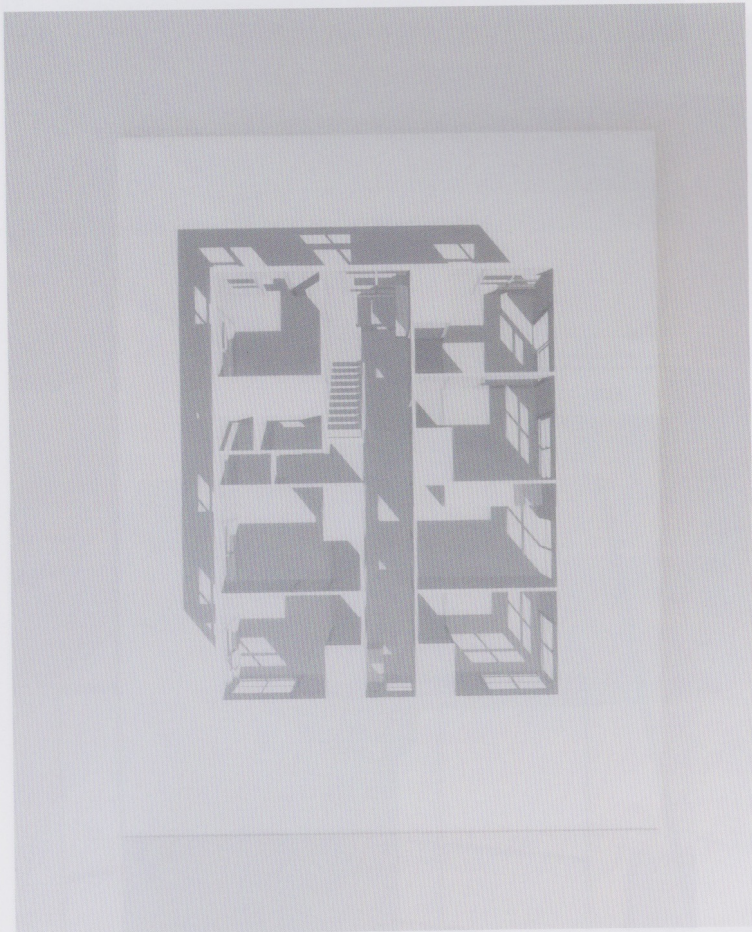
玉山拓郎
《M.B.》
2022 / スチルス、セーター / φ40cm、高さ可変

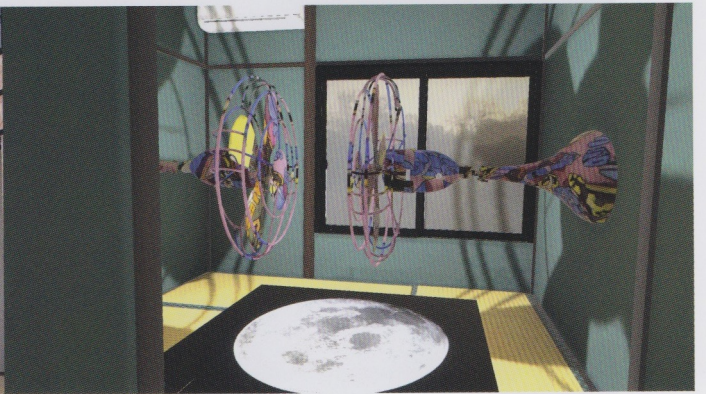
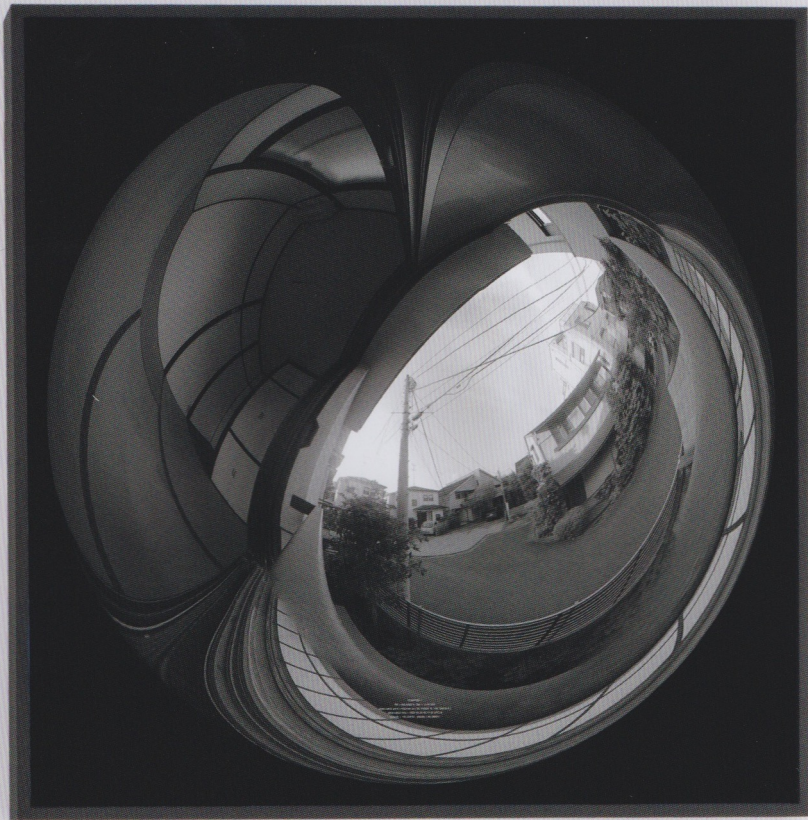


207

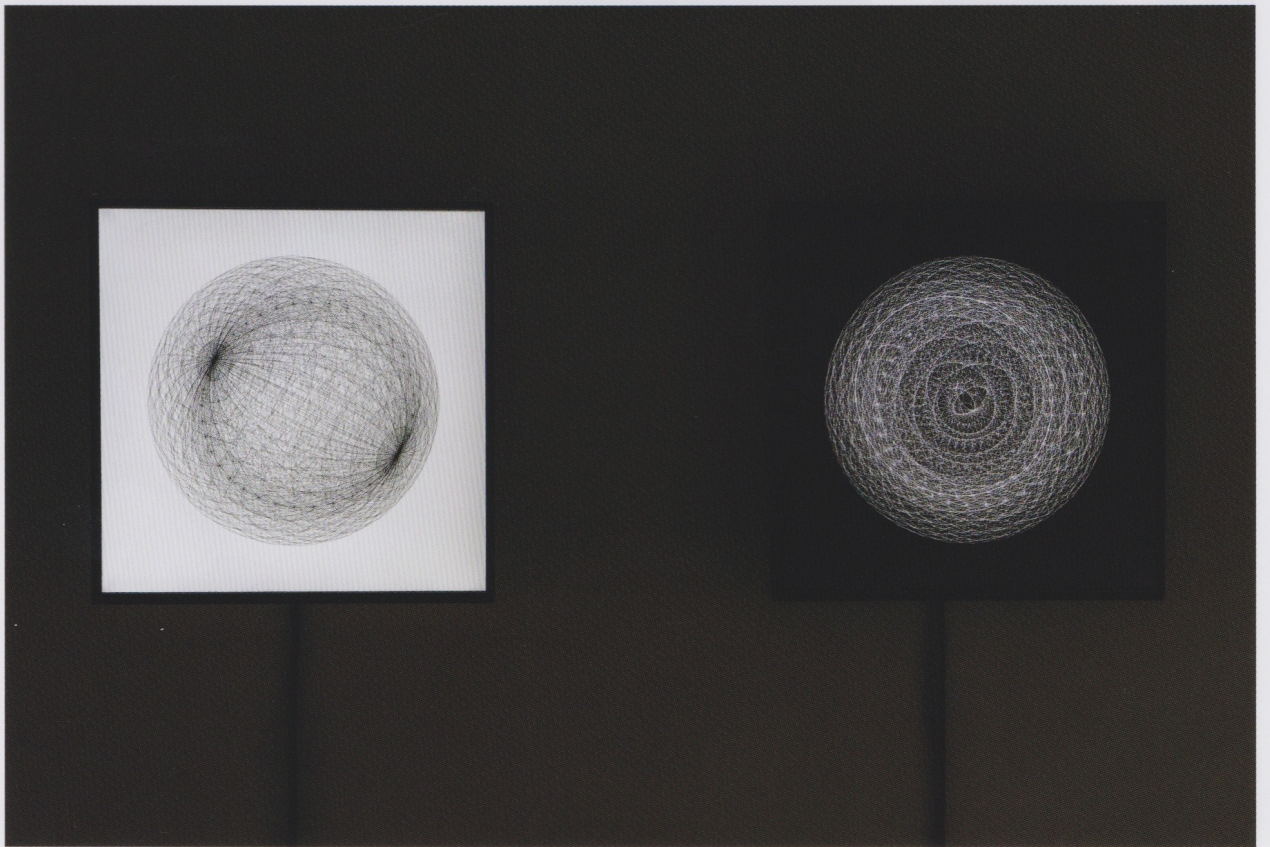
平川紀道
《[spherical coordinates]》(左)
2019 / コンピュータ、液晶ディスプレイ / サイズ可変
《[opt coordinates]》(右)
2019 / コンピュータ、液晶ディスプレイ / サイズ可変



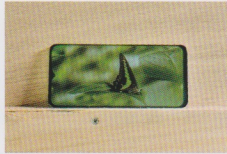








津田道子 | Tsuda Michiko



d HDビデオ、モニタ



《外出する》
2022/
映像 7分15秒/
協力:サンダー・ワッシュク、石澤依子



e 倒木

平川紀道 | Hirakawa Norimichi



f 水、浮草



《habitable zone
[TRAPPIST-1, no.5]》
2022/
インクジェットプリント/
62×62×3.6cm

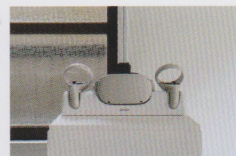


g インク、トレーシングペーパー
(出典:四門文化財研究室 2009
『東京都新宿区宝泉寺跡3』)

平田尚也 | Hirata Naoya



h デジタルプリント、種子、典具帖紙



《kakinoki203》
2022/
VRChat world



i インク、紙、土

古橋まどか | Furuhashi Madoka



j HDビデオ



《辻、朽ちる、生す》
2022
a 枯草

山根一晃 | Yamane Kazuaki



b 陶土(焼成)、枯草



《59日-柿の木荘-》
2022/
埃/
31.5×41.8×3cm

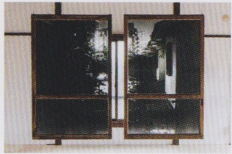


c 倒木片



《リフォーム》
2022/
石(床石)、木(床束)、
真鍮、外付けHDD、データ、布、人/
サイズ可変

鈴木のぞみ | Suzuki Nozomi



《Other Days, Other Eyes:
柿の木荘2階東の窓(夜)》
2022/
外されていた窓、写真乳剤/
各137×88×2.8cm

玉山拓郎 | Tamayama Takuro



《Doubled Bottle》
2021/
樹脂、スプレーボトル/
26×20.5×5.5cm



《Parallel Dishes》
2022/
映像 10分



《M.B.》
2022/
ステンレス、モーター/
φ40cm、高さ可変



《Spinning Mop (Silver Hair)》
2022/
ステンレス、ボールチェーン/
170×150×4cm

津田道子 | Tsuda Michiko

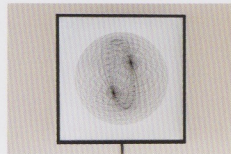


《階段を上る》
2022/
映像 2分15秒/
出演: 豊田ゆり佳、中尾拓哉



《柿の木荘202号室》
2022/
映像 2分 出演: 豊田ゆり佳

平川紀道 | Hirakawa Norimichi



《S³[hyperspherical coordinates]》
2019/
コンピュータ、液晶ディスプレイ/
サイズ可変



《S³[hopf coordinates]》
2019/
コンピュータ、液晶ディスプレイ/
サイズ可変

平田尚也 | Hirata Naoya



《Old Time Machine》
2022/
デジタル銀塩プリント/
42.3×34.4cm



《Old Time Machine 434》
2022/
HDビデオ 4分34秒

山根一晃 | Yamane Kazuaki



《リフォーム》
2013/
自転車/
サイズ可変



Limnisa

AMPHI-Y
(KOKUYO)

「メディウムとディメンション Liminal/After」

展覧会

『メディウムとディメンション:Liminal』 2022年9月3日(土)-9月27日(火)

2023年3月3日 刊行